

花伝書別紙口伝

一 花を知る事

此の口伝に、花を知ること、

先づ、仮令、花の咲くを

見て、万に花と喩え始めし

理を弁うべし。

抑花と云ふに、万木千草

に於いて、四季折節に咲く

ものなれば、其の時を得て

〔口訳〕

此の口伝に於て、能楽の花、を知ることに就ては、先づ、自然の花の咲くのを、見て、それによつて、万事に於て、花を以て喩へ始めた所以を理解するがよい。

一体、花といふものは、万木千草に於て、四季折節に咲くものであるから、その咲くべき時を得て咲き、珍らしく感ずる故に、人々がこれを賞翫するのである。能楽に於ても、見物人が

珍^{めづら}しき故^{ゆゑ}に、玩^{もてあそ}ぶなり。猿^{さる}

楽^{がく}も、人^{ひと}の心^{こころ}に珍^{めづら}しきと知^し

る所^{ところ}、即^{すなは}ち、面^{おも}白^{しろ}き心^{こころ}なり。

花^{はな}と、面^{おも}白^{しろ}きと、珍^{めづら}しきと、

これ三^{さん}つは同^{おな}じ心^{こころ}なり。何^{いづ}

れの花^{はな}か散^ちらで残^{のこ}るべき。

散^ちる故^{ゆゑ}に依^よりて、咲^さく頃^{ころ}あ

れば珍^{めづら}しきなり。能^{のう}も住^{ぢう}す

る所^{ところ}無^なきを、先^まづ花^{はな}と知^し

べし。住^{ぢう}せずして余^よの風^{ふう}体^{てい}

に移^{うつ}れば珍^{めづら}しきなり。

但^{たゞ}し、様^{やう}あり。珍^{めづら}しきと

云^いえばとて、世^よに無^なき風^{ふう}体^{てい}

を為^し出^{いだ}すにてはあるべから

珍らしいと感じる所が即ち面白い感なのである、従つて、花と面白いと珍らしいと、この三つは同じ感であるのだ。如何なる花でも、いつまでも散らないで、残るものは無い。散るからこそ、咲く時節になつて咲くのが珍らしいのだ。能も、一つの風体ばかりを演じないのが花だと先づ心得るが良い。一つの風ばかり演じないで、他の風体に移るやうにすれば、珍しさがあるわけである。

但しここに注意すべき仔細がある。いくら珍しさが良いといつても、世に行はれてゐないやうな風体を為出すといふのではない。花伝書に示した所の条々について、これを悉く稽古しつく

ず。花伝に出す所の条々を、
悉く稽古し終わりて、さ
て、猿楽を為ん時に、其の
物数を、用々に従いて取り
出すべし。

花と申すも、万の草木に於
いて、何れか四季折節の、

時の花の外に、珍しき花の
有るべき。その如くに、習
い覚えつる品々を究めぬれ
ば、時折節の当世を心得て、
時の人の好みの品に因りて、
其の風体を取り出す、是時
の花の咲くを見んが如し。

して、さて能を演ずる場合に、その習
得した様々の曲を、適材適所に取り出
して演ずべきである。

花といつても、万木千草に於て、四
季折節に咲く花以外に、何の珍らしい
花があり得ようぞ。それと同様に、能

に於ても、習ひ覚えた能の各体を究め
たならば、その時々の人々の好尚によ
つて、それに向くやうな風体の能を選
んで演ずる、これ丁度、四季時々の花
の咲くのを見ると同じである。花とい
ふのも去年咲いた花と変りはない。能
も、曾て見た風体の能ではあるが、各
様の曲に通じた演者は、その様々な曲
を一通り演じる間に、相当の年月が経
つものだ。従つて、同一の風体の能も、
久しぶりで見る時には、又珍らしく感
じるものである。

花と申すも、去年咲きし種
なり、能も元見し風体なれ
ども、物数を究めぬれば、
其の数を尽くす程久し。ひ
さしくて見れば又珍しきな
り。

其の上、人の好みも色々に

して、音曲、振る舞い、物
真似、所々に変わりて、と
りぐなれば、何れの風体
をも、残しては叶ふまじき
なり。然れば、物数を究
め尽くしたらん為手は、初
春の梅より、秋の菊の花の

以上述べた上に、人の嗜好といふも

のは千差万別で、音曲・ふるまひ・物
真似等の好みに於ても、所所で変つて
様々なものがあるから、何れの風体を
も悉く演じ得るやうでなくては不十分
である。それで、物数を究め尽した役
者は、丁度初春の梅花から秋の菊花の
咲き果てるまでの、一年中の花の種を
持つてゐるのと同様で、如何やうな花
でも、人の望みに応じ、時と場合に
じて、それぞれ適当なものを取り出すこ
とが出来る。物数を十分に究めて居な
いと、時によつては人々の望みのもの
を出し得ないで、花を失ふことがある。

咲き果つる迄、一年中の花の種を持ちたらんが如し。

何れの花なりとも、人の望

み、時に因りて取り出すべ

し。物数を究めずば、時

に依りて花を失う事あるべ

し。仮令ば、春の花の頃過

ぎて、夏草の花を賞玩せん

ずる時分に、春の花の風体

ばかりを得たらん為手が、

夏草の花は無くて、過ぎし

春の花を又持ちて出でたら

んは、時の花に合ふべしや。

是にて知るべし。只、花は、

例へば、春の花の時節が過ぎて、人々が夏草の花を賞翫しようとする時分に、春の花の風体ばかりが得意な役者が、夏草の花を持たず、過ぎた春の花をまた持ち出したとしたら、それは到底時の花に合ふ筈はない。以上のたとへで知るが良い、ただ花といふのは、見物人の心に珍らしく感じるのが花であるのだ。花伝書の花の段に、「物数を究め、工夫を尽して、然る後に花の失せぬ所を知るべし」といつてあるのは、この口伝であるのだ。それで、花といつて何も特別なものがあるのでは

ない。物数を尽し、工夫を究めて、珍らしさといふ感を心得るのが花である。「花は心、種はわざ」と書いてあるのも、この事であるのだ。

見る人の心に、珍しきが花
なり。然れば、花伝の花の
段に、「物数を究めて、工
夫を尽くして後、花の失せ
ぬ所をば知るべし」とある
は、此の口伝也。されば、
花とて別には、無きものな

り。物数を尽くして、工夫
を得て、珍しき感を心得る
が花なり。「花は心、種は
態」と書けるも是なり。
物真似の鬼の段に、「鬼ばか
りを善く為ん者は、鬼の面
白き所をも知るまじき」と

物学条々の鬼の段に於て、「鬼ばか
りをよくせん者は、鬼の面白き所を
も知るまじき」とも述べたのは、役者
が様々の曲に互つて、所謂物数を尽し
て後、鬼を珍らしく演出したならば、

も申したる也。物数を尽く
して、又珍しく為出したら
んは、珍しき所、花なるべ
き程に、面白かるべし。余
の風体は無く、鬼斗を為
る、上手と思はば、善く為
たりとは見ゆるとも、珍し

その珍らしい所が花となるであらうか
ら、面白いであらう。しかし、他の風
体をやらず、鬼ばかりを演ずる上手
だと見物が心得てゐたならば、たとひ
鬼は上手に演じたとしても、そこに珍
らしさといふ感じは起るまいと思はれ
るから、その演出に花といふものはあ
らう筈がない。「巖に花の咲かんが如
し」と述べたのも、鬼を演じては、強
く恐ろしく、見物が肝を消すといふ風
に演じなくては、凡そ鬼の風体なるも
のは無い。これ即ち巖にも比すべきも
のである。所が、花といふのは、あら

き心、有るまじければ、見

所に花は有るべからず。「巖

に花の咲かんが如し」と、

申したるも、鬼をば、強く、

恐ろしく、肝を消す様に為

るならでは、凡その風体無

し。是巖なり。花と云ふは、

ゆる風体を演じて、見物が優雅至極の
上手だと思ひ馴れて居る所へ、思の外
に、鬼のやうなものを演ずると、非常
に珍らしく見物が感じる。これが花な
のである。だから、鬼ばかり演ずる役
者は、言はば巖ばかりで、花はないわ
けである。

余の風体を残さずして、幽
玄至極の上手と、人の、思
い馴れたる所に、思いの外
に鬼をすれば、珍しく見ゆ
る所、是花なり。然れば、
鬼斗を為んずる為手は、巖
斗にて、花は有るべからず。

〔評〕 此の段は、別紙口伝の中の序段ともいふべき条で、先づ花といふもの
に関して、徹底的な解釈を加へた所が眼目である。問答条々に於ては、
幽かな暗示を与へたにすぎないが、それが此の段に於ては、実にあざや
かに胸がすくばかりにキビキビと解明せられて居る。これだけに鮮明に
解き得るものならば、問答条々に於ても、もう少し説き明しても差支な
いであらうにと、感じられる読者もあられるであらう。が、そこが秘
伝の秘伝たる所で、先づ悩み苦しみ工夫省察の限りを尽さしめて後に、

この秘伝を伝える所に、伝へたものが、即時に被伝受者の魂の眼を開かせる力と化するのであつて、そこに言ふに言はれぬ神秘的な悟りが生れるのである。禅の公案工夫にも似た処がある。伝へるべき時期の至るまでは秘するといふ事が、真に秘伝を生かす所以であることを考へ度い。

「花と、面白きと、珍らしきと、これ三つは同じ心なり」といふ条。「能も住する所なきを先づ花と知るべし」といふ条。これ二つが殊に眼目の所である。

芸能で人が感心させられるのは、その上手さ・うまさであり、上手さ・うまさが見物の心を打つて、ここに面白さが生じる。花の要件として面白さといふものを出したのは如何にもと首肯し得る。下手では面白さが無い。然るに世阿弥は面白さの中に、珍らしさといふ要素を加へて居る、上手の芸でも、何回も何回も連続して同じものを見せられては、見物に倦怠の心が生じるといふのも、動かすべからざる真理である。そこで見物の心理を見通して、彼等が要求しさうなものを、先手を打つて提供し、演技に変化あらしめて、珍らしさの感をかち得るとなれば、その上手の芸は常に百パーセントの芸術的効果をあげ得る。花は、いはゞ、

百パーセントに発揮せられた芸術的效果であるとも言ひ得る。「猿樂も人の心に珍らしきと知る所、即ち面白きなり」と世阿弥はのべてゐて、上手さ・うまさといふ事には言及してゐないが、「物数をつくし工夫を得て、珍らしき感を心得るが花なり」といふ中に、これが含まれてゐると私は考へる。いくら珍らしくても、下手ではてんで問題にならないからである。

「能も住する所なきを先づ花と心得べし」といふのも、珍らしさの感を常に保ち得んが為である。元来「住する」といふ語は、金剛經に、「応

無所住而生其心」といふ有名な文句もあつて、仏教上での用語である。一所に停滯して押し移る事を知らぬのを「住する」といふ。芭蕉の語でいへば、流行を知らぬものであり、近代的な表現を借りれば、発展性を失つた凝固状態をいふ。世阿弥はそれを軽く用ひて、常に変化ある珍らしさを持つことを、住する所なしとのべたのである。

次に珍らしきといふ条件に対して、一つの警戒の辞をあたへてゐる。それは、「珍らしきと言へばとて、世になき風体を為出すにはあるべからず」である。新奇なものをせよといふのでは無くて、「花伝に出す

所の条々を悉く稽古し終りて、さて猿楽をせん時に、その物数を、用々に従ひて取出」して演ずる事であるといふ戒である。「万づの草木に於て、何れか四季折節の時の花の外に、珍しき花のあるべき」などといふ比喻は、実に生きて使はれてゐるのを感じる。

第三に、花の基礎的な要件として、物数を究めつくすといふ条が示されてゐる点を注意し度い。即ち如何なる能をも完全に演じ得るまでの鍛錬修行をつむことが大切だといふのである。時と所と人によつて、ここでは如何なる能を演ずべきかを見分けるのが「花は心」の心である

が、いかに心が働いても、適切な曲を即座に演じ得るだけの平素の用意たしなみを欠いては、全く何にもならない。泥棒を見つけてから縄をなつては遅いのである。

最後に、鬼の面白さを説き、「巖に花の咲かんが如し」といふ条を説明した所など、如何にも手に入つたもので、ただ成程と感心させられるばかりである。